

# 後期水戸学における攘夷思想の形成

——藤田幽谷から会沢正志斎への伝承と進化をめぐって

張 陽

The Beginning of *Sonno jōi* in Later *Mitogaku*:

Over the tradition & evolution of Scholarship  
from Fujita Yūkoku to Aizawa Seishisai

ZHANG Yang

Fujita Yūkoku and Aizawa Seishisai, the pair of teacher and student, have the similar career. Both of them joined the *Dai Nihonshi* (大日本史, literally Grand History of Japan) project and became the leader in editorial group. Although both received punishment when they offered the advice to the lord about politics reform. Fujita passed down the ideas to Aizawa about the problem with Russian in North. And Aizawa acquired abundant knowledge about western countries. This article will clarify the differences between Fujita Yūkoku and Aizawa Seishisai's scholarship.

Keywords: *Mitogaku*, Fujita Yūkoku, Aizawa Seishisai, *Dai Nihonshi*, Early modern Japanese philosophy

キーワード：水戸学、藤田幽谷、会沢正志斎、大日本史、日本近世思想

## はじめに

水戸学は水戸藩において形成された学問、学派で、大義名分論や尊王敬幕などの政治思想を展開させ、幕末の攘夷運動の原点と見なされている。

『史記』の「伯夷列伝」に啓発されたと第2代水戸藩主徳川光圀（1628（寛永5）-1701（元禄13）年）は1657（明暦3）年江戸にある駒込別邸内に史局を置き、紀伝体日本史書の編纂を図ろうとした。1665（寛文5）年には日本へ亡命した朱舜水が招聘され、実用を重んじた学風が重視されたが、この時の編纂方針において水戸学派は南朝正統論を唱え、戦前の日本に大きな影響を与えた。光圀期の歴史書編纂は彼の死後にも暫く続けられたが、主裁である安積澹泊の死により、50年間ほど中断した。一般的にこの段階を前期と呼ぶ。

第6代藩主徳川治保（1751（寛延4）-1805（文化2）年）の時にいたって、史書の編纂は立原翠軒を中心として再開された。当時は藩内の農村荒廃や蝦夷地でのロシア船の出没など、内憂外患の危機感が強まっていた。一方、水戸藩は深刻な財政難に陥っており、史館は編纂作業にとどまらず、農政改革や対ロシア外交など、具体的な藩内外の諸問題の対策を考案した。

翠軒の弟子である藤田幽谷は、1789（寛政元）年に『正名論』を著して、大老の松平定信に呈示した。当時の「国王復号」論を問題視するこの一文は、天皇と幕府の絶対的な上下秩序を説いたものとして知られる。

さらに、1824（文政7）年、イギリスの捕鯨船員が水戸藩領内に上陸する事件が発生し、幕府はイギリス人の要求をそのまま受け入れて飲水と食料を提供した。このことをきっかけとして、水戸藩内の攘夷思想が広まった。翌年、幽谷の弟子である会沢正志斎はこの尊王攘夷思想を体系化して『新論』を著したのである。

明治維新以降にはその源流である徳川光圀とともに水戸学派は盛んに称揚された。特に1890（明治23）年、明治天皇の水戸行幸の直後に発布された「教育勅語」は、「国体」という用語を取り上げ、内容においても水戸学の影響が顕著である。

## 一、先行研究と背景

戦前の近代天皇制国家のイデオロギーのもとで水戸学は尊王攘夷ないし明治維新の中樞と評価された<sup>1)</sup>。戦後になって、水戸学の性質を捉えるために、水戸学研究はまずその「藩・幕関係」につき水戸学派の尊皇思想は「佐幕か反幕か」の問題を焦点としたのであって、瀬谷義彦のように「幽谷学たるゆえんのもの（中略）その絶対的な国体観念」であり、天皇の「絶対唯一」に対して、將軍の権力は一時の情勢にすぎないと捉え、「正名という意識の積極的な発動を伴えば」、「本然の状態への復古が考えられて来る筈」だとして、「反幕府的」<sup>2)</sup>だと理解する人もがいた。一方で丸山真男のようにそもそも諸侯と藩士の「攘夷」の動機は違っており、水戸学派は「封建的身分的階級制と抵触するどころか、むしろその基礎づけとして役立ちうるものであった」<sup>3)</sup>と捉える人もいる。

丸山以後、尾藤正英を代表者として「正名」を中国からの外来思想として取り上げる研究者が多くなり、修史にせよ改革にせよ、日本の近代国家形成という長期のスパンから見て、後期水戸学派は「日本の国家の統一性と強化」を「真の目的」<sup>4)</sup>として目指したと指摘する者もいる。

以上の文脈に沿って、本稿にかかわる二人に関する近年の先行研究について述べれば、会沢正志斎の研究は少なくない。主に『新論』の成立から晩年までの尊皇攘夷思想を近代国家主義の形成という流れの中で、その重要性を考える研究がある（たとえば関口直佑『近代日本国体論の研究：会沢正志斎と考

1) たとえば西村文則は『正名論』を「勤皇思想、大義名分主義、国粹主義」を標榜している。西村文則『藤田幽谷』（平凡社、1940年）、129頁。

2) 瀬谷義彦『水戸学の史的考察』（中文館書店、1940年）、159頁。

3) 丸山真男『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、1952年）、353頁。

4) 尾藤正英「歴史思想」（『中国文化叢書10 日本文化と中国』所収、大修館、1986年）に参考。

証学』（国書刊行会、2019年）、安見隆雄『会沢正志斎の生涯』（錦正者、2016年）。

藤田幽谷の研究は正志斎より少なく、その農政論を日本近世の経済面で論じことが多い<sup>5)</sup>。また国学の受容や、後期水戸学派の成立として立原翠軒との関係も言及されている<sup>6)</sup>。

しかし、ここで指摘したいのは、幽谷と正志斎の継承関係についての研究が乏しいことである。たとえばこの2人は師弟関係であるが、幽谷からいかなる学問を継承し、発展させたのであろうか。この問題は前期から後期への水戸学の転回と発展を通観するために無視できないことだと思われる。本稿は藤田幽谷の代表作『正名論』が成立する1791（寛政3）年から、『新論』が成書する年1825（文政8）年までの時間帯を区切って、現存する藤田幽谷と会沢正志斎の書簡や文稿を考察し、「伝承」をキーワードとして師弟関係に対する研究の空白を埋めたい。

## 二、『新論』成立以前の経緯

藤田幽谷（1774（安永3）-1826（文政9）年）は、後期水戸学の中心人物である。幼少期から立原翠軒に学び、1789（寛政元）年、15歳の少年幽谷は彰考館の正式館員となり、『大日本史』の編纂に携わることになった。

『正名論』は藤田幽谷が16歳ころ書いたものとされ、「名分思想の原点」、「水戸学の思想の主要な柱」<sup>7)</sup>、「尊王攘夷を代表する水戸学の出発点」<sup>8)</sup>など評価されているように、ここで述べられた尊卑秩序論は光圀の「皇統を正閏す」<sup>9)</sup>という修史観念を継承するとともに、さらに後の水戸学全体の尊皇基調を定める接節点に位置するものとされている。

前述のように、立原翠軒は長く停滞していた修史事業を再開し、後世の水戸学端緒を開いた人物といわれているが、史書編纂の方針をめぐる、幽谷は翠軒との対立を深め、ついに絶交という結末を招いた。

両者の対立点は主として次の三点である。

- ① 『大日本史』という書名を、幽谷は『史稿』に変えるべきだと主張し、翠軒が反対した。
- ② 『大日本史』の志・表について、幽谷は継続、翠軒は廃止すべきだと主張した。
- ③ 論賛の是非に対して、幽谷はこれに反対し、翠軒は賛成とした。

このような対立は幽谷の「与校正局諸学士書」に明白に著されている。さらに、1797（寛政9）年、史書編纂の方針を含めた藩政批判を述べた上書「丁巳封事」で、不敬の罪を問われて免職となった折に幽谷は翠軒に破門された。こうして史局内部の対立が表面化したのである。しかし、1803（享和3）年、論賛の存続をめぐる翠軒は致仕を命じられ、『大日本史』の編纂事業から外され、幽谷は総裁の任につくことになった。

5) たとえば大淵利男「藤田幽谷の『勸農或問』と財政経済論」（『政経研究』10（1）、1-44、1973-06）。

6) たとえば吉田俊純『寛政期水戸学の研究 翠軒から幽谷へ』（吉川弘文館、2011年）。

7) 瀬谷義彦『解題』（『日本思想大系 53 水戸学』所収、岩波書店、1975年）、474頁。

8) 尾藤正英『尊王攘夷思想』（『岩波講座日本歴史近世 5』、岩波書店、1977年）、78頁。

9) 徳川光圀『梅里先生碑陰銘』（高須芳次郎『水戸学徒列伝：水戸学入門』収録、誠文堂新光社、1941年）331頁。

23年後の1826（文政9）年、幽谷の死去を受けて彰考館総裁代役に就任したのは会沢正志斎である。幽谷は18歳の時に私塾を設け、10歳の会沢正志斎（1782（天明2）－1863（文久3）年）を入門させ、観念的な学問より実用のための学問を受けさせたという（『及門遺範』）。1821（文政4）年に会沢は藩主・徳川治紀の諸公子の侍読を命じられる。1824（文政7）年には水戸藩領大津（現北茨城市大津町）の浜に食料を求めて上陸したイギリスの捕鯨船員と会見した（いわゆる大津浜事件）。正志斎は藩命を受け、その会見の様子を記した報告書『諸夷問答』を幕府に提出し、翌年にはその対策について、尊王攘夷論を体系的にまとめた『新論』を著した。1840（天保11）年に正志斎は小姓頭となり、藩校の弘道館の初代教授頭取に任じられる。

『新論』はもともと第8代水戸藩主徳川斉脩への上書であり、当時において出版は禁じられたが、藩内部とくに門人らの手で写され、匿名書物として流通した。全篇は上下二巻で、上巻では「国体」（上、中、下）、「形勢」、「虜情」の計三論五編により構成されている。「国体」篇では古事記や日本書紀などの天皇神話などを引用し、忠孝一体、尚武、愛民の精神を日本の伝統（国体）として述べ、「形勢」篇で欧米諸国の存在を示して新たな世界観を論じ、「虜情」でロシアやイギリスなどの海内進出という状況を説いた。下巻は「守禦」、「長計」計二篇で構成されている。「守禦」篇は西洋の大砲、遠洋船に倣い、それと匹敵する製造技術を提案し、全国の軍事力配置や存続、いわゆる「富国強兵」の策を考えた。「長計」篇では武士階級だけではなく、庶民教化の重要性を論じ、耶蘇教と対抗するために、神道の国教化を勧めた。「全篇を貫く尊王攘夷の主張は幕末期青年志士に甚大な影響を与え、明治維新運動の思想的背景となった」<sup>10)</sup> という。

『正名論』の中の尊皇思想は中国先秦王朝の天子・諸侯の秩序が見られる。天子（天皇）は虚位にして覇主（幕府）は実権を握るが、それに反して身分を重んじる封建秩序において、名義的な天皇の位は絶対的である。いかに軍事力を持つ者でも超越することはできない<sup>11)</sup>。さらに『新論』になると、国学の影響が顕著にみられる。「三種の神器」や「三韓征伐」などの神話や伝説によるものも記されて、天皇信仰の神秘性かつ日本の独自性を表すようになっていく。一方で、世界観についてかつての「三国史観」は豹変し、日本の中華化が『新論』において定着した。四書五経からの引用は減り、それに対して「祭政一致」の構想の論拠として、儒学から転じた「忠孝一体」が文章の大半を占めている。

### 三、経世精神の継承と発展

藤田幽谷の青年期、すなわち安永・天明・寛政年間には水戸藩領内において一揆が多発した。東北地方を中心とする「天明の大飢饉」は幽谷10歳の時（1782（天明2）年）に始まり、事実上朝廷が江戸幕府の救済政策に容喙するという未曾有の出来事にも繋がる。また、蝦夷地へのロシア使節の来航と交渉など、異国船対策を考えざるを得ない。このような幕府にとってはいわゆる「内憂外患」の背景の下で、

10) 前掲書、『日本思想大系 53 水戸学』474頁。

11) 『正名論』に関しては拙稿「藤田幽谷の『正名論』の捉え方」（『東アジア文化交渉研究』(14)、2021年）423-433頁参照。

幽谷の政治思想が形成されたと考えられる。

彼の長男藤田東湖作の「先孝次郎左衛門藤田君行状」は少年時代の幽谷について詳しく記している。その中に「精励刻苦、益学に勤め」、「四書五経は数月ならずして誦読して業を卒う。十一にして詩を賦して、十三にして文章を作為す」というように、「藤田神童」とも呼ばれたこともある<sup>12)</sup>。

ただ幽谷の関心は文采ではなく経書にも止まらなかった。彼にとって学問の志向は「濟世の術」であり、「将に以て古を学び、官に入り治平の功を輔けん」とす<sup>13)</sup> という抱負を持っていた。それに対して賦詩と作文は「彫虫の技」にすぎなかった<sup>14)</sup>。

17歳の時に著した『安民論』（1790（寛政2）年）において、幽谷は『正名論』と同じく士大夫から天子まで下位者が上位者を敬う構造に基づきつつ、指導者階級が「仁心仁聞ありと雖も、民を安んずること能はざれば、則ち仁にあらざるなり」<sup>15)</sup> といひ、君主が庶民を重んじる政治の道を促した。

会沢正志斎もその影響を受けて、「形勢を憂へ、道を求めて苦心勉励」した<sup>16)</sup>。彼は学友である岡崎子衛宛の手紙の中にこのように記している。

語曰、古之學者為己、今之學者為人。而今世之為文學者、小習讀書、乃登筵講說……其賦詩屬文、辭調妍媚、如曇如霞、如織成之錦、讀之則足以驚耳目、而原其意如癡人說夢耳……是以讀人所讀之書、而觀於其所未見、察於其所未思、專心一志、急當之務、苟可以正君濟民者、取以為己用。寧實有餘而華不足、勿有餘於華而不足於實……只要無走浮華而遺實用耳。<sup>17)</sup>

正志斎にとって文章は美しい表現より内容の方が大切であり、「正君濟民」すなわち君主を補佐して民を救う学問に努めるべきだという。総じて、やはり幽谷当初の考えに沿った「実用」の学を目指しているといえよう。

また前述の『大日本史』命名問題をめぐる幽谷と翠軒の論争において、正志斎は幽谷に忠実に従った。「與小林子敬・岡崎子衛書」（1808（文化5）年）において、すでに江戸彰考館勤務となった正志斎は恩師の代弁者として以下のように述べている。

義公之修史也。其要在正名一事也。然大典未成、中道捐世矣。……高橋・藤田先生、獨以為、大日本史之號、於義不安。反復辯論、白之先公、換以史稿。而後名正言順、義公正名之義、賴以不誣矣。<sup>18)</sup>

12) 茨城県郷土文化研究会編『長久保赤水』（茨城県郷土文化研究会、1970年）24頁。

13) 原文は「答木村子虚」（菊池健二郎編『幽谷全集』収録、吉田弥平、1935年）243頁。

14) 原文は「問燕欲論経国業、恥将小技事雕蟲」。日本史籍協会編『藤田幽谷関係史料 二』（東京大学出版会、1935年）433頁。

15) 前掲『幽谷全集』226頁。

16) 名越時正編『會澤正志斎文稿』（国書刊行会、2001年）9頁。

17) 同上34頁。

18) 同上56頁。

ここで「正名」の語を使っているが、幽谷の『正名論』と違い、光圀が始動した史書編纂事業そのものを「正名」と解釈している。幽谷は『論語』の「名正ざれば言順わず」という概念を借用して、「大將軍」の名を「撰政」に改正すべきと考えてた。「皇統を正閏す」という光圀の当初の修史動機と同一視することで、幽谷は「正名」理論を正当化したのである。したがって、史書名の改正も「正名」理論と巧妙に関係づけされ、それを否定することは光圀を否定することに繋がり、到底不可能なこととなる。

顧みれば、そもそも『正名論』は松平定信に呈示した小文であり、その時に幽谷はまだ本格的に史書編纂事業にたずさわっていない。そのためか光圀や史書のことにも全く触れていないが、のちの書簡から見れば、幽谷は「光圀の遺志」を強く意識して、修史の精神を終始まで貫こうとしたといえる。

西山公、前世の遺書を求め、孜孜として已まず。諸を名山及び通邑大都に得たる者、勝げて数ふべからず。今や西山公精神の聚る所、徒らに蠶魚の餌に供せらる。豈に悲しからずや。<sup>19)</sup>

ここで幽谷は、光圀死後の事業を收拾した安積澹泊が亡くなってから、立原翠軒が史館総裁に就任してこれを再開するまでほぼ50年間の空白を、「蠶魚に供餌」のような時間の無駄遣いとして批判している。

しかし、修史事業の再開から修史方針をめぐって論争を引き起し、その代表的な争点が上述した史書名の改正であった。1797（寛政9）年に書かれた「与校正局諸学士」では、幽谷の主張につき「『大日本史』の題号をすべからず」として4つの理由を述べている。

- ① 「大日本」という国号が存在しないこと。
- ② 元来修史の権力は朝廷にある。その許可を受けずに史書を私撰する場合「日本」の国号は使用できないこと。
- ③ 史書編纂の範囲は前朝まで終えることは通例であり、本朝に言及する前例はない。「易姓革命」もない「天朝（日本）」にとって、それは妥当ではないこと。
- ④ 朝廷に報告せずに『大日本史』として出版しようとするのは、自らを朝廷と同等と見なすことであり、僭越であること。

史書の編纂はもとより中国の修史伝統に倣うもので、したがって、史書の構成や命名方式などはすべて中国の史書と同一にする必要がある。

しかし、幽谷にとって史書の編纂は「義公の遺志」を実現するための事業であり<sup>20)</sup>、「綿々たる皇統」を尊ぶというみずからのための達成目標である。つまり、史書の命名ないし編修事業自体の正当性に関する解釈権の所有者は朝廷とされながら、実際にこの理論を唱える幽谷はむしろ朝廷の意志とは離れて修史事業の正当性を解釈している。このような矛盾は後期水戸学派に終始一貫していると思われる。

一方、正志斎の考えでは「日本史」という題号を朝廷から賜わったとしても、それは「国体」を損ずることであった。

19) 前掲「呈伯時先生」『幽谷全集』232頁。

20) 栗原茂幸「藤田幽谷の政治思想—後期水戸学の形成」(『東京都立大学法学会雑誌』24(2)、1982年)、89頁。

（もし「日本史」とすれば）日胤之統、由是而與彼異邦易姓革命者無以別、神明之邦、由是而無以見其廣大無外也。然則此號、非 朝廷宜所賜也。故其自我命之、與 朝廷賜之、二者雖如有小異、而自天下而大觀之、其虧損 國體則一矣。<sup>21)</sup>

ここでは「易姓革命論」の否定により、日本と中国の相違を強調している。国学の影響は明白であろう。本居宣長が述べたように、日本から見た場合、和学・国学はただ学問だけといい、漢学は外来のものとして漢学と呼称べきだということと同じことである。日本（＝日出ずる処）という名称は結局他国目線であり、自国に相応しくないという。その代わりに後期水戸学派の数多くは「神州」、「中国」、「天朝」などと自称するようになっている。

#### 四、華夷思想とロシアへの関心

1790（寛政2）年の書簡「送原子簡序」において幽谷は光圀の修史事業を以下のように解釈している。

我 西山先公。嘗憂是非之迹。不明於天下。而人无所勸。惡者無所懼。乃慨然修大日本史上議 皇統之正閏。下辨人臣之賢否。尊 帝室以賤霸府。内 天朝以外蕃國。<sup>22)</sup>

ここで、幽谷「内天朝」と「外藩国」を対比させている。これは『公羊伝』の「内其国而外諸夏、内諸夏而外夷狄」（成公15年）の概念を借用したもので、それと明記されなかったが「尊王攘夷」の意味が含まれていると見られる。

国の内外の区別（あるいはアイデンティティー）として、幽谷の文章において「日本」の名称はよく考慮されている。前述のように「与校正局諸学士書」（1797（寛政9））において、幽谷は「日本」の前に「大」の字を添える史書題名に強く反発し<sup>23)</sup>、「天朝」の語を使うところが数箇所あるが、むしろ「日本」を用いる場合が圧倒的に多い。

1794（寛政6）年の「卜欲篇序」に至って、中国と日本の区別は顕在化した。

篇中所録。悉係異邦之事。以美王制之得焉。則周礼慈幼之政。越語生聚之訓。漢家胎養之令。宋氏棄殺之禁。臚列亡遺。以嘆末俗之失焉……其稍黠者讀之。得以藉口。必謂。西土文明之邦。尚有此事。不独我 神州為然……昔者岐豊之地。周人用之。斯有麟趾之風。秦人用之。乃成虎狼之俗。非天之生民爾殊也。顧其所以導之如何耳。而況 神州古称仁而寿。好生之德。人所固有乎。他日仁政流行。膏沢下降。如雨如露。一洗旧染……<sup>24)</sup>

21) 「與小林子敬・岡崎子衛書（文化5年、1808年）」前掲『正志齋文稿』、57頁。

22) 「送原子簡序」前掲『幽谷全集』265頁。

23) 「天朝建号曰日本矣、未聞其曰大日本也……建号曰日本、固為無上至尊之称、奚必待称大而後尊哉」。前掲『水戸学』372頁。

24) 「卜欲篇序」、前掲『幽谷全集』531頁。下線は加筆。

「異邦」「西土」(中国)には古より常に治乱盛衰があり、庶民の流離殺棄など残虐な事柄が数多くある以上、神州(日本)にもこのような非道なことがあるのは当然だろうという観点に対して、幽谷は反論している。中国であれ日本であれ、その民の生死興亡は専ら指導者いかに左右されるが、日本は「仁にして寿」の国<sup>25)</sup>であり、幕府のような素晴らしき指導者があれば百姓の生活は憂いがなからうという。「神州」日本の人間はより優れた徳を備えているということから見れば、「日中優劣」の論争<sup>26)</sup>において日本側に加担していることは間違いない。そのためか、中国を総体的に「異邦」や「西土」と称している。

『新論』の場合、正志斎はさらに「中国」の称を用いている。

仏法之入 中国、朝議謂国家有祀典、不宜拝蕃神、而逆臣馬子私奉之、与皇子厩戸等党比、興造伽藍、自是僧徒日衆、争鼓其説、民志於是乎離渙矣。<sup>27)</sup>

而或昧於名義、称明清為華夏中国、以汚辱国体、或遂時狗勢、乱名遺義、視天朝如寓公、上傷列聖之化、下害幕府之義……<sup>28)</sup>

ここに示されているように日本を「中国」と呼ぶのは単なる地理的な概念ではなく、道徳風化の価値評価によるものである。自分は日本人であるから自国を「中国」と呼び、日本を文明の中心とする「華夷」的な理論である。この点には幽谷とはやや相違する。

水戸藩においてこの「華夷」思想が形成される<sup>29)</sup> 同時に、西洋の存在感はますます強くなった。特にロシアの侵攻を危惧したことで、蝦夷地を含む日本全国の海防問題に関する関心が高まった。

「卜筮篇序」が著された同じ1794(寛政6)年に、幽谷は「赤人」の南進に言及し、宍戸藩主松平頼救に献言した<sup>30)</sup>。また、つとに「丁巳封事」(1797(寛政9)年)では以下のように述べている。

今北虜之警、歳切一歳、而当路之人、率喜無為、常鎮以静、以臣觀之、其不知時甚矣……自有北虜之警、幕府屢嘗下令、使縁海諸侯予備不虞、此強兵之良機不可失也、閣下何憚、而不敢為乎、臣

25) 幽谷によれば古の日本は「君子国」であり、長寿不死であるとされる。前掲「幽谷随筆卷之二」『幽谷全集』531-534頁に参照。

26) 十七～十八世紀の朱子学の導入により、山鹿素行、熊沢藩山、山崎闇齋学派などの自他認識が芽生え、中国よりむしろ日本(幕府)の「文武の徳」の方が素晴らしいという「日本中華主義(あるいは反中華主義)」が生まれた。桂島宣弘『自他認識の思想史』(有志舎、2008年)参照。

27) 「新論 国体上」前掲『日本思想体系53 水戸学』387頁。

28) 同上 388頁。

29) この「華夷主義」はもともと春秋・戦国時代に生じた自他認識である。近世日本においては『春秋』や『論語』、『孟子』などの儒家経典から正統論、大義名分論などを抜粋して日本式の華夷が作り上げられたと思われる。浅見綱齋「中国辨」(『日本思想大系31 山崎闇齋学派』所収、岩波書店、1980年)参照。

30) 「2月22日長久保赤水宛書簡」前掲『幽谷全集』参照。「赤人」については同書 704頁。なお、この文は『全集』では寛政9年とされているが、ここでは瀬谷義彦の考証に従う。「藤田幽谷の第一回封事の年代並に内容に就いて」『水戸学の史的考察』所収(中文館書店、1940年)参照。



窃為 閣下惜之……<sup>31)</sup>

ここに見られるように、幽谷はロシアに対して危機感を持ち、藩主治保に「何をか憚りて敢えて為さざるや」という強烈な問いかけで強兵の策を献上した。その結果、不敬の罪に問われ、史館編修の職も奪われたことは前述したとおりである。

林子平の『海国兵談』が禁書とされたことにより、幕府の対外政策どころか、安易に防論を指摘する環境は失われつつあった。1808（文化5）年には作った詩において「宇内至尊天日嗣、須令万国仰皇朝」<sup>32)</sup>と、幽谷は海防論への関心から徐々に尊皇思想へたどり着いたと思われるが、ただここで注意しなければならないのは、正志斎と違って幽谷から藩主宛の封事においてこの詩のように「皇国」の偉大さを鼓吹する文章が存在しない。このような配慮は『新論』において正志斎の狂信的な表現とは対照的である。

一方で、幽谷は「国体」という言葉を使っているが、正志斎とは少し違っている。1807（文化4）年の「丁卯封事」において、幽谷は「郡奉行の組頭を執政にて仕候事国体に於て甚害有之事と奉存候」<sup>33)</sup>と述べている。この場合の「国」とは水戸藩を、「国体」とは「藩の体面」を指していると思われる。

1810（文化7）年の「進大日本史表」では「(史書は)私撰に属すと雖も、苟も世に伝ふれば、国体に係はる有」<sup>34)</sup>と書かれている。これは『漢書』や『宋史』などの中によく見られる「有係於国体」と類似する表現で、日本全体を指していると思われる<sup>35)</sup>。

幽谷のこの用法に対して、正志斎の「国体」に対する使い方としては、例えば『及門遺範』に以下のようにある。

先生尤重君臣之義、恒語人曰。天祖垂統、天孫繼承。奉三器以照臨宇内。皇統綿綿。與天壤無窮。実如 天祖所命。是 神州之所以冠四海万国。天祖 天孫。固與天一矣。世々相襲。号天津日高。騰極謂之 日嗣。神天合一。與殷周配天。尚不免於與天為二者不同矣。先生論国体、其大旨如此。蓋奉 義公之遺志云。<sup>36)</sup>

文中で「先生」幽谷の教えがこうだったと論じているのはやや不自然である。なぜなら、天皇神話に基づく易姓革命の否定論は当時の水戸学の独自の思想ではないし、前述した幽谷の「国体」に関する文書から見ると、幽谷は「天孫繼承」や「三器」などの伝説を日本の「国体」だと説明していることは想像しがたい。つまり、これは正志斎がみずからの「国体」の表現を用いて幽谷の尊皇思想に付会したも

31) 前掲『日本思想体系53 水戸学』379頁。

32) 「戊辰元旦」前掲『幽谷全集』所収 499頁。

33) 「丁卯封事」前掲『幽谷全集』所収 604頁。

34) 進大日本史表」前掲『幽谷全集』所収 222頁。

35) 他の例を挙げれば「から学者之内にも種々有之稽古徴今、通達国体、よく天下の憂に先つて憂候ものも有之、詞章記誦曲学阿世之徒も可有之」「甲申呈書（1824、文政7年）」前掲『幽谷全集』723頁。

36) 会沢正志斎著「及門遺範」（嘉永3年、1850年）前掲『幽谷全集』に収録、781頁。

のだと思われる。

「攘夷」意識が高まるもう一つの面として、西洋の情報を収集し、かつ本格的に西洋人と接触したのは正志斎の方である。その『千島異聞』（1791（寛政3）-1805（文化元）年）<sup>37)</sup>は、文化初年において入手可能なロシア関係書を、和書18種、漢籍10種ほど網羅して作り上げたもので、正志斎にとって『新論』作成のための不可欠な素材になったと思われる<sup>38)</sup>。

前述の『諳夷問答』<sup>39)</sup>は、大津浜事件で上陸したイギリス船員12名に対する筆談に基づき、筆談役である正志斎が作成した報告書である。それによれば、正志斎は「地球図」を用い、西洋諸国の国名から位置、国旗まで船員に確認している。異国人上陸という事件に対して慌ただしく現地に駆け付け、穏便に尋問する様子が、文中には示されており、ここには普段の対外関心と豊富な知識が見られる。<sup>40)</sup>

実際、1847（弘化4）年、正志斎は晩年の作『下学邇言』において、西洋学について、「西夷の書を読み、万国の形勢を審かにし、火器・船制等の利を曉り、以て国家の用に供するは則可なり」<sup>41)</sup>と述べている。

以上によって見れば、後期水戸学派の「華夷」思想と西洋への関心は互いに増幅させる関係にあり、中国の儒教思想が日本本土の国学思想と接触して幅広い論争を引き起こしているという思想的な背景のもとで、ロシアの蝦夷地進出など幕府にとって現実的な「外患」問題に迫られて、最終的に極端な「尊王攘夷」論が生み出されたと思われる。

## おわりに

藤田幽谷と会沢正志斎との師弟二人はほぼ同じような経歴をたどった。この二人は『大日本史』の編纂事業にたずさわり、相次いで総裁の任に就いた。また藩政改革への建言によって謹慎する、後に復活して職位を取り戻す。正志斎のロシアを主とする外国への関心を喚起したのはもちろん幽谷であったが、それにとどまらず、正志斎は豊富な西洋情勢に関する知識の持ち主となった。

その一方で、正志斎は幽谷の学問を継承しながら、国学へと理解を深めた。もともと「国の面目」の意味である「国体」という表現の使い方を変えることで、天皇を中心とする尊皇攘夷思想を明確な形で創出したのである。

幽谷から正志斎へ、世界認識は広がるにもかかわらず、自尊的かつ排外的な「国体論」は系統化していく。このように後期水戸学においては学問や思想上の営みが徐々に変容し、積み重なっていく実態が見られるのである。

37) 栗原茂幸「『千島異聞』考一初期会沢正志斎の思想形成」（『東京都立大学法学会雑誌』（30-1）、1989年）、182頁。

38) 栗原茂幸「翻刻 千島異聞」（『跡見学園女子大学紀要』第26号、1993年3月）に参照。

39) 諳夷は暗厄利亜（アングリア＝イギリス）のこと。

40) 栗原茂幸「『新論』以前の会沢正志斎一注解『諳夷問答』」（『東京都立大学法学会雑誌』第30号、1989年7月）に参考。

41) 高須芳次郎『水戸学全集2』（日東書院、1933年）322頁。